

Title	<書評>「意匠学・色彩学」中村正男・向井裕彦共著 建帛社発行
Author(s)	山崎, 勝弘
Citation	デザイン理論. 1967, 6, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52522
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

「意匠学・色彩学」

中野正男・向井裕彦共著

建帛社発行

日本人を対象として書かれた本は「分り易い日本語で記し、身近かにある適切な題材を例にとり、もし読者がそれを見ようと思えば見ることが出来るようなものについて解説しその上で海外の文化を紹介比較する」という行き方が望ましい、と日頃から考えていたところ、この度建帛社から発行された中野正男向井裕彦共著「意匠学・色彩学」を一読した時、私の考え方が的はずれではないことが分った。さてI編意匠学を開けば、先ず日本民族の伝統工芸のデザインの意義を紹介し、被服デザイン、室内デザイン、産業デザイン等の応用面を通じて、一読者にデザインが身近かなものであることを認識させ、デザインの世界に親密感を持たせ乍ら、「意匠の基礎」へと誘導して行くあたりは、さすがに長年デザイン教育に専念して来た著者なればこそその観がある。

デザイン関係の図書には附図の多いのが特徴とされているが、いたずらに図を多く入れたのではなく「必要にして充分な」図が適当に挿入されていることは、そのこと自身すでにデザインの主旨に付ていると思う。ただ写真版の印刷が明瞭でない点が惜まれる。私の手にした本が偶然そうだったのなら良いが。

第4章プロポーションとハーモニーの所に玉川長一郎君のゴールデン・プロポーションを引用されている点は感銘深いものがある。

更に故向井寛三郎氏の図案学を引用し、日本における図案学(現代の意匠学)の開拓者の功績を後世に伝えようとの心意気は賞讃に価するであろう。更に日

本の紋章デザインを解説してあるが、日本の紋章デザインは国際的価値の高いものであり、デザインを学ぶものにとって無視してはならないものであると思うが、紋章デザインは写真版にするよりも凸版にして白・黒のコントラストを明瞭に出した方が良かったのに、と老婆心乍ら申し上げたい。

次はⅡ編色彩学について一言。従来刊行されている色彩学の図書には見られないような独自の世界が感じられる。モンドリアンやカンジンスキーを冒頭にあげ、「言語と色彩」を対照させ乍ら抽象的思考の普遍化の追求が色彩学の目的であると主張するあたりは著者らしい風格を示している。デザイン専攻で、測色学を学んだ著者は色彩の数量的取り扱いや照明と色彩等の方面にも研究を進めており、色彩における感覚と数理との両面をマスターする実力を所有し、いわば「虎に翼」の強味がある。世界的に有名なムーンとスペンサーの色彩調和論やその他の外国色彩学者の学説を説くに当っても予めその長所・短所を解説し、初心者への陥り易い欧米学者への盲信を戒めている点、本当に色彩の世界を探究した学者であることを物語っている。更に現代の推計学や電算機の重要視される世の中で初心者が考え勝ちな問題点、例えば色彩調和の数量化への理想論に対しても、分り易く親切に誘導しつつ、「調和感や美意識」のような高度の精神活動を単純な方程式の中で解決することは未だ無理な話であることを述べ、むしろ各自のセンスを養うことの方が先決問題であるという行届いた締めくまりがなされている。

この上に色刷が2・3頁もあれば云うことなのだが、そこは需用者に対する価格の問題もあり、著者の自由にならない所かも知れない。

緒言に述べられているように「意匠や色彩についての参考書は種々あるが、大部分はそれぞれ独立して編集されている。しかし意匠と色彩は不可離の関係を有するところから、本書ではⅠ編を意匠学、Ⅱ編を色彩学として読者の便宜を考え」親切で便利な編集の仕方であるから、短大乃至四年生大学のテキストとして役立つばかりでなく、一般教養図書としても推賞出来る本である。

奈良女子大学教授 山崎勝弘